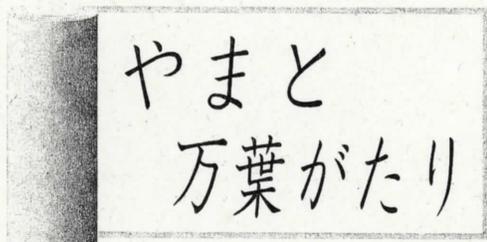




# 妹があたり あは袖振らむ 木の間より 出で来る月に 雲なたなびき

作者未詳(巻七・一〇八五)

今回の歌は男性が女性のもとを訪れて帰った際、別れを惜しむ気持ちで詠まれたと解釈されている一首です。『万葉集』は全部で20巻あり、作者が記された時代順に並べられた巻もあれば、作者不明でテーマごとにまとめられた巻もあります。今回の歌は後者にあたる巻七のうち、雑歌「月を詠む」と題された部分に収められています。歌の中の「妹」はきょうだいでなく恋人や妻を指し、愛しい人に袖を振りたい、と歌います。そして、雲がかかっている月を隠すことがないようにと歌いかけます。街灯もない当時、夜は真っ暗になります。愛しい人の住むあたりを見るにも、袖振る姿



を相手に見てもらうにも、月明かりだけが頼りでした。月は「山」から出ると歌われる例が多くを占めます。今回の歌のひとつ前にも「山のはにいさよふ月(山の端に漂う月/巻七・一〇八四)が出るのを待つ歌があるほか、三笠山や高円山、倉橋山など具体的な山の名を伴う例

も多くあります。

一方この歌では山ではなく「木の間」から出る月が詠まれます。これは柿本人麻呂の「石見相聞歌」と呼ばれる歌群中の一首「石見のや高角山(石見の山)の木の間よりあが振る袖を妹見

つらむか(石見の、この高角山の木々の間からわたしの振っている袖を、妻は見ただろうか。/巻一・二三三)の影響があるとも考えられています。現在、別れぎわに手を振ることは当然のより、かかってくるな。

▲訳▼妻のいるあたりに向かって、わたしは袖を振りたい。木の間から出て来る月に、雲よ、かかってくるな。

うに思われますが、これは袖を振ることが由来だといわれています。袖を振ることは、別れるときに限らず、相手の魂を引き留めようとするものだったようです。

「やまと万葉がたり」はこれをもって最終回となります。ご愛読くださったみなさまとの別れを惜しみ、袖を振りたいと思います。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)